

一歳六ヶ月児の気質と母親の育児不安

田 中 詩 乃

【問題と目的】

近年、核家族化が進むにつれて、育児責任を一人で負担すべき立場にいる若い母親が増加し、育児に対する不安が蓄積された状態にいる母親も多い。牧野(1981)の定義によると育児不安とは「子の現状や将来あるいは育児のやり方や結果に対する漠然とした恐れを含む情緒の状態」であり、それがある期間持続している状態を指す。こうした育児不安に影響を与えると考えられる要因には、母親の年齢、職業の有無、夫婦関係など、様々なものが考えられる。これまでの研究では主に、こうした子を育てる母親をめぐる要因と育児不安の関係について考えられてきたが、育てられる子ども側の要因も母親の育児不安に影響を与えられる。例えば子どもの気質について、気質的な扱いにくさが母親の育児に対する自信を失わせたりするという報告(本城ら、1996)があり、ほかにLee & Bates (1985), Gross, Conrad, Fogg & Wothke (1944), Sheeber & Johnson (1992)も、子どもの気質的難しさが母親の心理へ何らかの影響を与えることを報告している。そこで本研究では、子どもの気質を母親の育児不安の一つの要因として考えることにし、両者の関係を検討することを目的とする(研究2)。さて、本研究の気質の概念を確認しておく、気質とは乳幼児の現象的な行動様式に見られる個人差であり、何をするかではなく、どのようにするかに注目するものである。気質の測定には、質問紙を用いた親による報告が用いられることが多い。最も多く使用されるのはThomas & Chessによって開発されたRITQであり、9つの気質カテゴリーが想定されている(①活動水準②周期の規則性③接近・回避④順応性⑤反応強度⑥感受性⑦気分の質⑧気の散りやすさ⑨注意の持続性と固執性)。しかし近年の研究によって、Thomasらが想定した構造とは必ずしも一致しない結果が報告されており(Lerner, 1993, 菅原ら, 1994), 基礎研究の必要性があるとされている。従って本研究では、RITQを使用して気質の測定を行う前に、RITQの構造分析を行い菅原らの追試を実行する(研究1)。

【研究1】

<目的>乳幼児の気質的特徴を測定する質問紙RITQの日本語版の構造分析を行い、菅原ら(1994)の結果との

比較を試みる。

<方法>愛知県内の4保健センターで6・7ヶ月健診を受診した母親にRITQを配布、郵送による返却のあった545名を対象とした。対象者の属性は、男児305名・女児240名、第一子298名・第二子179名であった。

<結果>RITQ各項目の回答頻度を分析した結果、無回答頻度が50以上のものは9項目存在し、評定の肯定側へ80%以上の回答が集中した項目は2項目存在した。RITQオリジナル9特性を構成している項目群で、それぞれの α 係数を見たところ、.50以下という低い値にとどまるものが3尺度存在した(反応強度、気分の質、気の散りやすさ)。次に無回答頻度50以上の項目を除いた86項目について因子分析を行った(主因子解バリマックス回転)。オリジナルに準じて因子数9で回転し因子負荷量0.3以上の項目について因子の解釈を行ったところ解釈可能な新9因子が得られ、①見知らぬ人・場所への恐れ②周期の規則性③食事上の気むずかしさ④活動性と視覚的敏感さ⑤世話のしやすさ⑥おむつの状態への敏感さ⑦注意の持続性⑧情動表出の強さ⑨遊び場面でのおとなしさと命名された。各尺度の α 係数はいずれも0.5以上であった。

<考察>無回答頻度が高い項目や、評定の偏りが大きい項目には、菅原らの結果と共通しているものもあり、これらの項目は一般性を欠いたり弁別性が少ない項目と考えられるので、除外を検討した方がよいかもしれない。RITQオリジナル9特性の信頼性と妥当性を検討したところ、菅原らの結果と同様に、問題があることが分かった。従来通りの使用は難しいと思われる。因子分析の結果得られた新9因子には、ある程度の信頼性が認められた。オリジナル9特性とほぼ共通していたのは周期の規則性など5特性で、食事上の気むずかしさなどの4特性は新しく現れたものである。新9因子の中には、乳幼児の日常生活の局面を表していると考えられるものがあり、本来の気質概念とは若干異なるものになっていた。RITQがはかろうとしている気質概念自体の再検討をはかる必要とともに、質問紙の洗練化を行っていく必要がある。

【研究2】

<目的>子どもの気質を母親の育児不安に影響を与える

要因の一つと考え、子どもの気質がどのように影響しているかを検討する。また、母親の育児不安に影響を与えられる他の要因と育児不安の関係を検討する。

＜方法＞名古屋市M保健所の一歳半健診を受診した母親に、RITQと育児不安測定用の質問紙を配布し、郵送による返却のあった93名を対象とした。

＜結果＞牧野によって開発された育児不安測定尺度（14項目、4段階評定）の一因子構造を確認し、不適当と判断された一項目「毎日張りつめた緊張感がある」を除いた13項目の加算値をもって育児不安尺度とした（ α 係数0.77）。最初に子どもの出生順位と母親の職業の有無によって、育児不安に違いがあるか否か確かめるため、子どもの出生順位（第一子または第二子以降）×職業の有無の2要因の分散分析を育児不安尺度に対して行ったが、主効果、交互作用ともに見られなかった。次に育児不安に影響を与えられると思われる要因について尺度を作成した。父親サポート度（4項目、 α 係数0.49）、子どもとの一体感度（4項目、 α 係数0.55）、他者との交流度（3項目、 α 係数0.69）、社会的活動度（2項目、 α 係数0.53）である。また研究1で作成した新気質9特性の研究2における α 係数を求め、0.23と著しく低い値となった情動表出の強さを除いた8尺度を気質関連の尺度とし、各尺度を構成する項目群の加算値をもって尺度得点とした。育児不安尺度と気質関連8尺度・父親サポート度・子どもとの一体感尺度・他者との交流尺度・社会的活動尺度の相関を見たところ、子どもが新奇な人・場面に後込みする傾向が強かったり、日常的な世話がしにくい気質的特徴をもっていた場合、あるいは父親のサポートが少なかったり、母親が子どもとの一体感を強くもっていたり、母親が家族以外に人間と接することが少ないと、母親の育児不安は強くなっていた。次に育児不安に対して尺度それぞれがどのように関係しているかを見るために、育児不安を従属変数、各尺度を説明変数とする重回帰分析を行ったところ、自由度調整寄与率は26%で有意な結果が得られた。有意水準10%以下ではあるが、世話のしにくさの標準偏回帰係数は-.20であり、子どもとの一体感尺度の標準偏回帰係数は.30（ $p < .01$ ）であった。日常的な世話がしにくい子供であったり、母親が子どもと強い一体感をもっていると、育児不安は強い傾向があった。

＜考察＞育児不安尺度と気質関連8尺度・父親サポート度・子どもとの一体感尺度・他者との交流尺度・社会的

活動尺度の相関では、見知らぬ人・場所への恐れと世話のしやすさという2尺度が育児不安に影響しており、子どもの気質的な行動特徴も母親の育児不安に影響を与えていることが示唆された。子どもの新しい人・場面に後込みする行動特徴は、母親によってネガティブにとられ易いことが育児不安の強さに関連するのだろうと推測される。また入浴・洗髪・爪切り等を嫌がって泣き叫ぶ子どもは母親の神経をすり減らせ、育児疲労感を増加させるのではないかと考えられる。子どもとの一体感が強いと育児不安も強いという結果については、子どもだけが生き甲斐というように心理的距離が近すぎると、子どもの問題が全て我がことのように感じられ、些細なことでも不安や悩みを強めてしまうためと考えられる。他者との交流度は、母親が子どもを離れ一人と社会的人間としての自分の存在を確認する機会として、育児不安を減じる働きをしていると思われる。夫のサポートも、母親に育児に対する安心と余裕をもたらすことによって、育児不安を減じているのだろう。育児不安に対する重回帰分析の結果からは、予想したように、子どもの気質も母親の育児不安に無関係ではないことが確かめられた。また、育児不安に最も強い影響を与えるのは、母親の子どもとの一体感であった。

【総合的考察】

本研究の結果、母親の育児不安には育てる母親側をめぐる要因だけでなく、育てられる子ども側の要因として気質的特徴も影響していることが確認された。母親側の要因では、子どもとの一体感の強さが強く影響していることが明らかにされた。子どもとの一体感が増加するのは、夫のサポート度や他者との交流度が少ない場合と考えられる。夫や他者から得られる社会的サポートは、母親のストレスを軽減する方向に働くという報告があり、子どもの気質が母親の心理に影響を与えるとした研究でも社会的サポートの重要性に触れている（Sheeber & Johnson, 1992, Cutrona & Troutman, 1986）。これらの知見からすると、子どもが気質的に難しいと確かに母親の育児不安は強まるが、夫をはじめとする社会的サポートが十分に母親に注がれば、育児不安は低減されると考えられる。このような社会的サポートの一資源として、専門家による育児カウンセリングの場が設けられ、一般化することを願いたい。